

線路使用料とダイヤ配分から見た鉄道貨物輸送の問題

小澤 茂樹（一橋大学大学院商学研究科博士後期課程）

環境問題などを背景に、近年、トラック輸送から鉄道貨物輸送にシフトさせる政策が講じられるようになった。しかし、この政策は殆ど功を奏しておらず、トラックに偏重した機関分担率に変化は見られない。鉄道貨物輸送へのシフトが進展しない理由の1つが、鉄道貨物輸送に関わる上下分離の形態や線路使用料、ダイヤ配分であると思われる。こうした認識の下、本研究ではヨーロッパにおける線路使用料の分析を通じて、日本の鉄道貨物輸送に関する線路使用料を考察し、鉄道貨物輸送の供給量制約問題にアプローチした。

本研究では、先ず、鉄道において上下分離を行う経済学的意義を考察した。上下分離の現状から考察を行うと、上下分離の経済学的意義は鉄道事業における効率性の向上と採算性の実現であると思われる。上下一体で鉄道運営が行われていた時代では、参入規制や運賃規制などの施策によって、費用低減産業である鉄道事業の効率性や採算性が維持されてきたが、上下分離は競争時代に直面した時代における鉄道政策のツールであると考えられる。なお、主にヨーロッパにおいては効率性の向上が、日本においては採算性の実現が上下分離の経済学的意義であると思われる。

次に、線路使用料に関する分析を行った。日本における上下分離の大部分は、新線整備や既存線の維持に用いられているため、線路使用料は原則として平均費用価格形成で設定され、効率的にダイヤを配分するという考え方は殆ど認識されなかった。一方で、形態は様々であるが、ヨーロッパにおいては効率的にダイヤを配分するという認識が強く、社会的費用を考慮した線路使用料のプライシングやダイヤ配分が考慮されている。線路使用料の設定については限界費用価格形成が原則とされているが、インフラ会社の収支均衡や混雑区間への対応などが配慮され、二部料金やラムゼイプライシングに近似した料金体系が構築されている。

以上の分析や考察を踏まえ、本研究の結論として以下の点を示した。鉄道貨物輸送の上下分離については、効率的なダイヤ配分やそれに応じた線路使用料の設定を行う必要がある。しかし、従来、この考え方が希薄であったことが、鉄道貨物輸送の供給量制約をもたらしてきたと思われる。線路という希少資源の最適配分を考慮すると共に、鉄道貨物輸送へのシフトを講じるのであれば、社会的費用を加味した線路使用料やダイヤ配分に関する施策を講じる必要性は高いと思われる。